

石製土掘り具の製作者

～和知村牧野（現:美濃加茂市牧野）における江口英夫氏採集資料から～

長屋 幸二

Who made stone scoops in the Jomon age, men or women?

～On materials collected at Makino, Wachi Village(present : Minokamo City), by Mr. Hideo Eguchi～

Koji NAGAYA

新しい栽培植物を作るように薦めながら、日本人は近代的な農具の使用を導入しようとした。

しかし、彼女は原始的な木製鋏しか使わない

アルレット・ルロワ＝グーラン, アンドレ・ルロワ＝グーラン 『アイヌへの旅－北海道1938－』

はじめに

今更指摘するまでもなく、石製土掘り具*は縄文社会における最も重要な道具の一つである。中部高地から南関東においては、遺跡の消長と当石器の消長が重なることから縄文社会を支えた道具であるという評価さえ与えられている。

石器を社会構造の中で評価する場合、目的によってさまざまなアプローチ方法がある。ある石器について、それがいつ頃使われたのか、使用頻度はどうであったのかを明らかにしたいのであれば、その石器の有無・数値的な数値化などを行えば良いであろう。どのような使われ方をしていたのかを考えたいのであれば、石器の形態の検討や、使用痕・欠損部位の観察、遺構や他の石器との組み合わせ、遺跡の立地などについて検討する必要がある。これらは従来より石製土掘り具研究に用いられてきた手法である。いずれも使用に関わる側面を重視した研究といえよう。

しかし、今までの石製土掘り具研究は、重要な視点を欠いてきたように感じている。それは、石器の生産・獲得に関わる視点である。石器の生産・獲得のあり方には社会のさまざまなサブシステムが反映していると考えられることから、旧石器時代研究では最もオーソドックスな視点の一つである。

石製土掘り具は、石鏃やスクレイパーなどのような鋭い刃縁を必要としない。そのため、利用石材に対する規制は弱く、黒曜岩や下呂石のような鋭い割れ口が得られなくても、ある程度の強度が確保できれば製作・使用に耐えうると考えられる。東海・飛騨のほとんどの地域では遺跡付近で得られる石材で十分に対応可能であり、そうした前提がそのまま石材獲得に関わる先入観となって

とらえられていることが多い。

また、石製土掘り具は遺跡内に製作の痕跡、すなわち素材を持ち込み加工した結果生じる残核や剥片類、未成品などを残すことが少ない。実際に製作の痕跡を目にできないと、製作に対する問題意識も生じにくいものなのであろう。こうした要因が重なったことが、石製土掘り具の生産システムに関わる議論を妨げてきたのだといえよう。

今回は、^{わかち}和知村牧野（現美濃加茂市牧野）において江口英夫氏によって地表面採集された石製土掘り具を中心に検討を行う。地表面採集資料であるため伴う遺構や石器組成などの検討はできないが、従来あまり検討されることのなかった石製土掘り具の石材獲得のあり方に焦点を絞って考えていきたい。

1. 江口英夫氏採集資料について

江口英夫氏は長く岐阜県職員として勤め、昭和の初め頃より転勤した地を中心に県内各地で考古資料を採集していた。採集品は縄文時代の石器が多く、石製土掘り具などの大きな石器には筆書きで採集日と採集地を明記し、石鏃などの小さな石器はボール紙を台紙にして糸で固定し、台紙に採集地を記している。資料の中には「斐太国上宝本郷」とマーキングのある多頭石斧の破片など稀少な資料も見られる。

江口英夫氏は昭和47年(1972)に65歳で亡くなられ、その後平成5年(1993)から平成8年(1996)にかけて御遺族より採集資料およそ1,400点が当館に寄贈された。その一部は常設展示や触察・体験学習などにおいて活用されている。

今回検討する資料は、江口氏が昭和18年(1943)から

同26年(1951)にかけて*2、当時の和知村牧野*3で採集した石製土掘り具76点である。江口氏は、和知村牧野において他にも石鏃5点(1点はオリブ色のチャート岩製、4点は下呂石製。下呂石製の1点が有茎鏃であるが、他は有脚鏃・凹基鏃である)、石匙1点(小型の下呂石製)、磨製石斧1点(両刃石斧、流紋岩製)、須恵器片1点(甕の胴部)などを採集している。縄文土器などは採集されていない。

地表面採集された資料の場合は特に、採集者の問題意識や関心などにより採集品目の偏りが大きくなる可能性がある。江口氏の場合、他遺跡での採集資料を見ても土器片や剥片類が少なく、選択の意識は強く働いていたように見える。したがって、当資料群における石器の割合がこの遺跡の石器組成の割合をそのまま反映しているのではないと考えられる。

2. 牧野小山遺跡

江口氏が多くの石製土掘り具を採集した牧野地区には牧野小山遺跡(県遺跡番号21211-04443)が広がっており、江口氏の資料もこの遺跡およびその周辺で採集されたものと思われる。

牧野小山遺跡は、西流する木曾川に南流する飛騨川が合流する地点の、両河川に挟まれた北東側段丘上に立地する。遺跡は広範囲に広がっており、西南部を島崎地点、西北部を狭間地点、東部を岐大農場跡地点などと細分されることもある。東に神明遺跡や小見戸遺跡、北に富田清友遺跡や深渡遺跡、飛騨川を挟んで西の対岸には野笹遺跡、木曾川を挟んで南対岸の可見市には川合遺跡群、宮之脇遺跡などが見られ、縄文時代以降の遺跡が密集する地域である。

牧野小山遺跡では2度の発掘調査が行われている。第1次調査は、昭和47年(1972)に岐阜県教育委員会と美濃加茂市教育委員会により、県道七宗可児線建設にともない実施された。段丘西部の飛騨川に近い狭間、島崎地点で南北に長い調査区が設定され、縄文中期後半の集落などが確認されている。第2次調査は平成7~9年(1995~1997)に財団法人岐阜県文化財保護センター(現:財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター)により、緑ヶ丘苗畑跡地利用事業にともなう事前調査として行われた。東側の岐阜大学農場跡地地点においてトレンチを主とする調査が行われ、5~9世紀を主とする集落などが確認されている。

3. 牧野採集の石製土掘り具

a) 年代

地表面採集資料はその一括性が定かではなく、年代の特定は難しい。狩猟具や採集具などの成品は他の遺物を伴わずに単体で残されるものも多いことから(麻柄 2003)、発掘調査で得られたものであっても年代の特定が困難な場合もある。

当資料群も同様に確定はできないが、県道部分の調査成果や江口氏採集資料に見られる石鏃の形態などから、採集地周辺には縄文中期後半から後期にかけての活動域が広がっていたことは確かなようである。おおよその見込みであるが、当資料群もこの年代であろうと想定しておきたい。この年代は東海地域においても石製土掘り具の利用が本格化する頃にあたり(長屋 2003)、多数の石製土掘り具が採集されていても不思議ではない。

b) 平面形態

石製土掘り具の平面形態は、両側縁が平行に走る短冊形、幅広の刃部を確保しながら基部をスリムに絞り込んだ撥形、胴部にくびれをもたせる分銅形ぶんどうに分類されることが多い。それに従い分類すると、当資料群では76点中74点とほとんどが短冊形である。残る2点が撥形で、分銅形としてとらえられるものは認められなかった。

c) 利用石材

利用石材は全てホルンフェルスである。堅硬で、叩くと「チン」と金属音がする。層理が発達し、一定方向にのみ薄く板状に剥離されやすいのは、変成を受ける前の母体が粘板岩であったことによる。

d) サイズ

長さは60mm~140mm、幅は30mm~50mmの範囲におさまるものがほとんどである(図1)。長さはばらつきがあるが、折れや使用などによる変異も考えられよう。幅は20mmの間にほぼきれいにおさまる。厚さも12mm~18mmという7mmの間に大半がおさまる(図2)、平面形態・サイズともよく規格化された状況が見られる。質量は70g~80g台をピークに、離れるにしたがい漸減する(図3)。当該期の美濃地域の資料の中ではやや小型の部類に入るが、可見市宮ノ脇遺跡(縄文中期後半が主体)においても同様の傾向が指摘されている(吉田 1997)。

e) 製作

①素材の獲得

粘板岩質ホルンフェルスの板状の剥片を素材に用いているが、円礫面を有するものは見られない。周辺の遺跡を見ても、やはり円礫面を残す石製土掘り具は少ないようである。石製土掘り具の素材は円礫から得たのではなく、露頭もしくはその近辺において獲得することが主であったのであろう。

ただし、野笹遺跡においては、石製土掘り具にも粗製

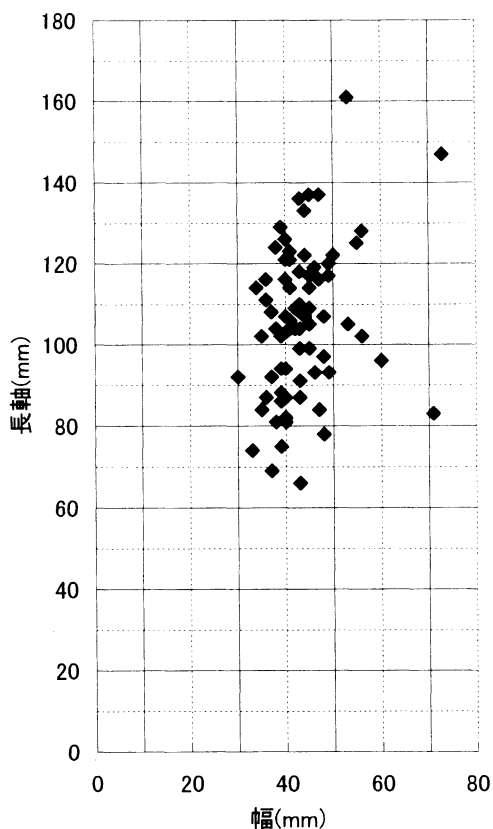


図 1

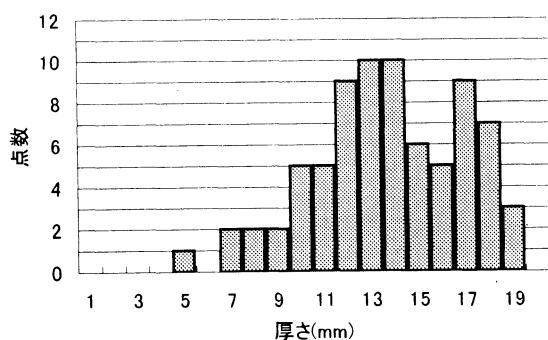


図 2

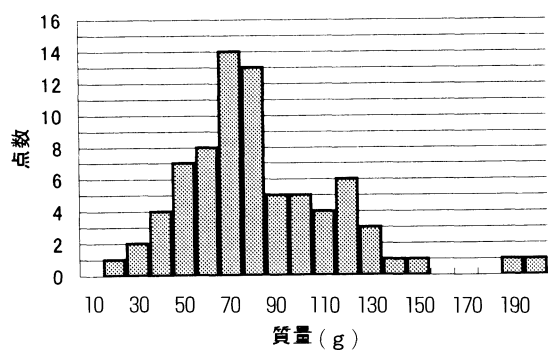


図 3

剥片石器^{*4}にも同石材が用いられているようである（千藤 2000^{*5}）が、石製土掘り具は円礫面を有さないものが多いものの、粗製剥片石器には円礫が多用されている。この違いの要因として、石製土掘り具と粗製剥片石器の所属時期の違い、必要とされる石材のサイズの違いなどが考えられよう。しかし、時期差と石材獲得のあり方の違いの因果関係については別の議論が必要であるし、サイズの問題も石製土掘り具が小形であることを考えれば根拠としては不十分である。両石器の間には使用・製作上の社会的差異が存在したのではないであろうか。これは本論のまとめの部分にも深く関わる問題であろうと考えている。改めて議論していただきたい。

②素材剥片の作出

素材剥片の作出は、特に厚さに留意して行われたようである。なぜなら、資料中、調整剥離によって全体の厚さを減じているものはほとんどなく、素材の厚さがそのまま石製土掘り具の厚さとなっているからである。前述したとおり 7mm の域内に多くがおさまる規格化された厚さの素材を作出しているようである。

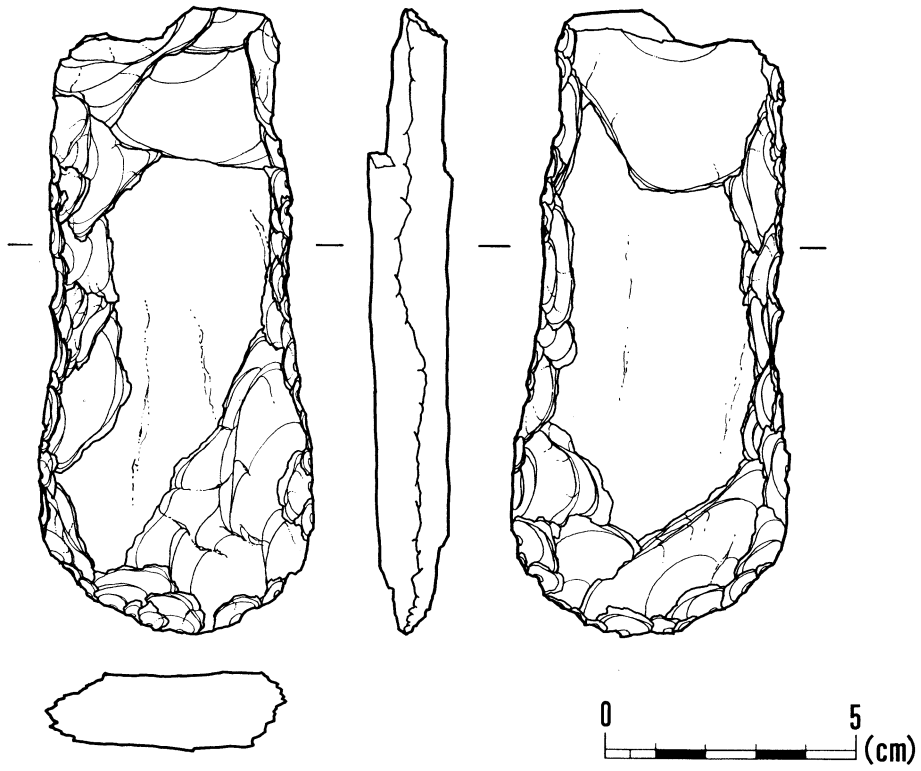
素材の主要剥離面も背面も打撃方向が明瞭ではない平坦面がほとんどであり、打面と打角に留意した通常の剥片剥離による作出というよりは、層理に沿って剥ぎ取られたもののように見える。層理は発達しており、コツさえつかめば扁平で厚さのそろった剥片をとることは可能であったであろう。

③調整・加工

素材剥離面の打撃方向は総じて不明瞭であるが、打撃方向が認定される資料を見る限り、剥片を横位に用いることが多かったようである^{*6}。

石製土掘り具には長軸一端もしくは両端から、厚さを減じる浅い角度の剥離が表裏両面に施されている（図 4^{*7}）。ただし、この剥離はそれほど深く入らないことから、刃部の角度調整が目的であり、全体の厚さを減ずることが目的ではないと考えられる。刃部の調整は、刃角を鋭く整える程度に剥離が軽く施されている。

一方、両側縁の加工は入念で、素材の改変度は大きい。器体の厚さを減じないよう、奥まで剥離が及ばないように急角度に加撃されている。幅が一定サイズに揃えられるのは、この入念な加工によるのであろう。この調整は、石材によっても若干異なっている。層理の発達が比較的弱い石材はステップを生じながらも剥離が成立しているのに対し（図 5 資料 2 層理写真）、層理の著しい石材は剥離というより削り取るようにして繰り返し急角度に打撃を加えている（図 4 資料 1 層理写真）ように見える。



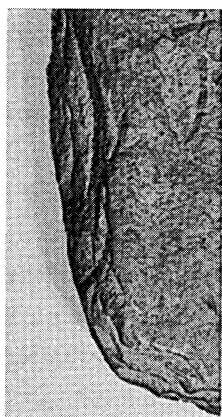
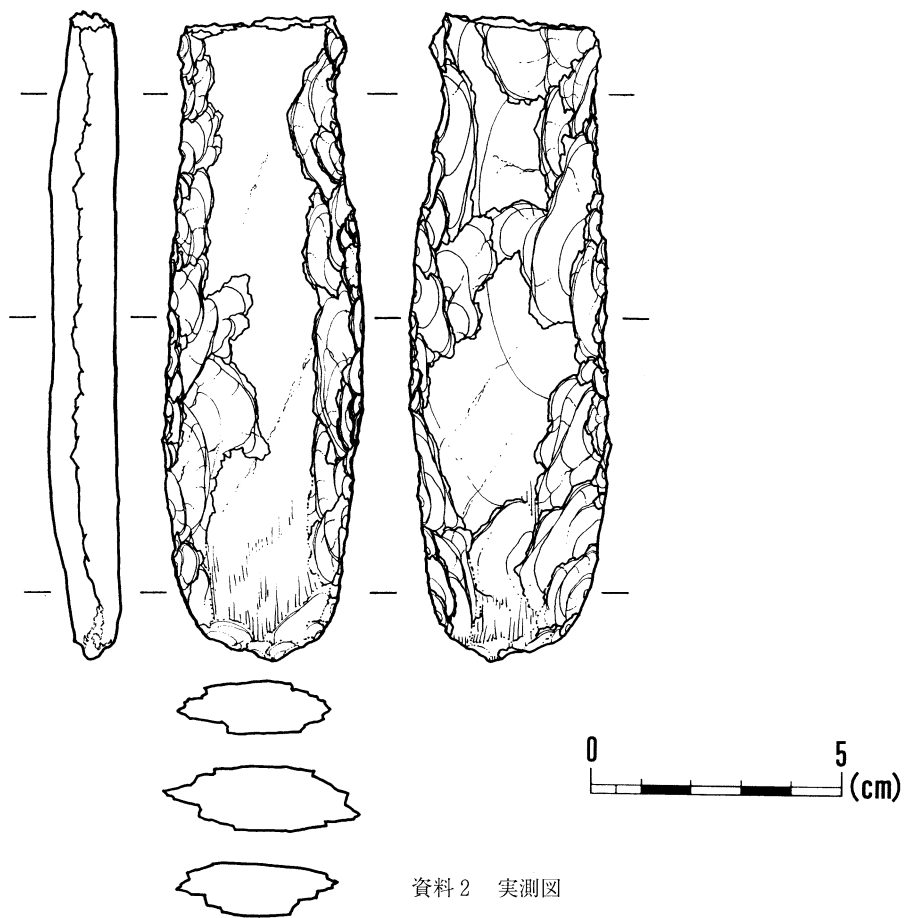
資料1 実測図



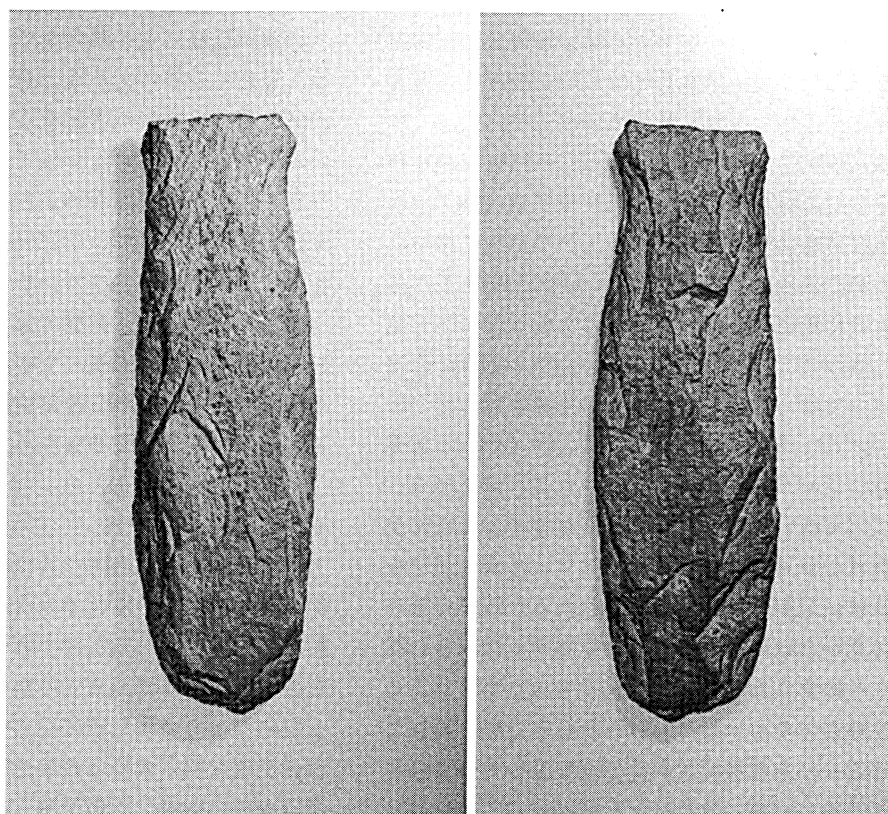
資料1 写真



資料1 層理写真



資料2 層理写真



資料2 写真

図5

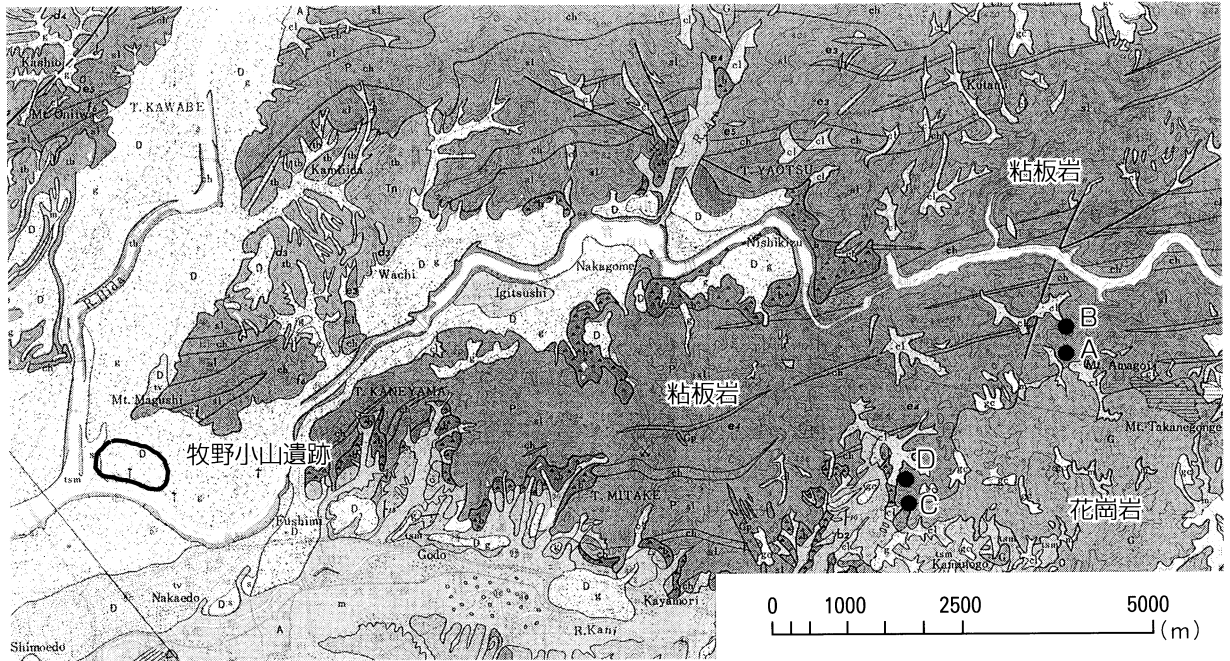


図6 牧野小山遺跡と踏査地点 (表層地質図 美濃加茂より)

4. 牧野の石材環境

この地域は、美濃帯と領家帯の接点であるとされる(近藤・坂巻ほか 1973)。牧野の辺りから八百津町・御嵩町にかけての広い範囲は秩父古生層に属する粘板岩に覆われているが、牧野から直線距離で12kmほど東の瑞浪市辺りには土岐花崗岩が顔を出している。石製土掘り具の素材となっているホルンフェルスは、粘板岩が花崗岩類に接するあたりで熱変成を受けたものであろうと考えられる。

平成17年(2005)1月12日に、ホルンフェルスの分布を確認するために現地踏査を行った(図6)。A地点・C地点など花崗岩類に近い箇所ではホルンフェルス化した粘板岩などが認められたが、B地点・D地点以北ではホルンフェルス化が認められず、見られた粘板岩は叩くと「モクモク」音がする軟質なものであった。今回踏査した箇所においては、ホルンフェルスは花崗岩類に接する約500m以内の狭い範囲内にしか存在しないという結果が得られた。

また、江口資料の石製土掘り具を観察すると、斑文が発達する石材が目立つことからホルンフェルス化がかなり進んだ石材が選択されていると思われる。石製土掘り具の素材は花崗岩類に近い限られた範囲内で採取されたのであろうと推測される。

同日、牧野周辺の河川等における石材の分布も調査したが、この辺りの木曾川河川敷は、現在はいくつものダムができていたため礫の散布状況を把握することは難しかった。段丘上では、濃飛流紋岩やチャート岩、粘板岩

などが地表面で見られた。八百津町の東部には木曾川が花崗岩類に近いところを流れる箇所があり、花崗岩類周辺部を削って木曾川に流れ込む谷も幾筋かあることから、ホルンフェルスの転礫も存在して良いであろうが確認することはできなかった。量的にはそれほど多くないのかもしれない。

段丘で採取できる礫の中で、濃飛流紋岩には注意を喚起しておく必要がある。濃飛流紋岩の円礫は、長良川流域などの縄文時代遺跡では石製土掘り具の素材として盛んに用いられている石材である。当地域でも石製土掘り具の素材となってもおかしくはない。しかし、牧野小山遺跡を含め美濃加茂市周辺の遺跡においても濃飛流紋岩はほとんど用いられていない。

牧野の人びとは、石製土掘り具の材料として、足下に利用可能な石材が存在しているにもかかわらず、採集地が限定されるやや離れた露頭辺りまで赴き、石材を採取し使用しているのである。

5. まとめ

牧野採集の石製土掘り具の観察と近辺における石材環境の現地調査から確認できたことがらをふまえ、濃尾平野北部地域における石製土掘り具の生産システムおよび社会的位置づけについて考察を加えておきたい。

石鏃などの剥片石器に用いられる黒曜岩や下呂石などは産出地が限られることから、確かに石材の獲得は容易ではない。一方、石製土掘り具には、石材に対する規制は剥片石器ほど強くは働かないが、その生産は集落内で

行われた痕跡が少ない。長良川上流の低位段丘面に位置する郡上市八幡町勝更白山神社周辺遺跡では、素材となる濃飛流紋岩円礫が豊富に確保できる場所（長良川の川原など）における集中的で規格化された生産のあり方が想定されている（長屋 1995）。当地域の粘板岩質ホルンフェルスについても、限られた石材産出地における生産を想定することができた*。

つまり、石製土掘り具に働く石材の規制は弱いにもかかわらず、必要に応じてその都度手近な石材を採取して用をたすような生産形態ではなかったといえる。石製土掘り具の製作は、集落を離れた場所において行われた。どこへ行けば必要な石材が手にはいるのかを知った上での行為であった。日常的に行っていたのではなく、計画的に集中的に行うものであったと考えられよう。

他にも、中津川市落合五郎遺跡の石製土掘り具の素材は7割が結晶片岩であるが、この石材は中津川市周辺では得られず、伊那谷方面からもたらされた可能性が指摘されている（斎藤 1991）。また、長野県北部千曲川流域の石製土掘り具には関東山地のものが見られるという（川崎 1997）。石製土掘り具の素材を遠隔地にまで求めるあり方は、決して当地域に限った現象ではなかったようである。

さて、石製土掘り具は土を掘る道具である。主に根茎類の採集に用いられたと考えられる（鈴木1983ほか）。私も、根茎類の採集は石製土掘り具の最も重要な用途であると考えている。しかし、だからといって、石製土掘り具の利用と根茎類の利用を必要十分条件の関係としてとらえることは短絡的にすぎる。

土を掘るという行為は、旧石器時代より行われていた。静岡県愛鷹山周辺ではAT層準より下位で多くのおとしあなが見ついている。縄文時代に入ってから、石製土掘り具の利用が本格化する以前から竪穴住居や土坑などは掘られていた。土を掘るには掘り棒などが用いられていたであろう。根茎類の採集も、掘り棒で可能である。石製土掘り具の利用は、直接には土を掘るために石の道具を選択したことを意味するに過ぎないのである。

では、何故石の道具を選択したのだろうか。それを考える前に、石製土掘り具を用いた根茎類の採集は誰の仕事だったのかを考えたい。女性か、それとも男性か、はたまた両性による仕事だったのか。

生態人類学の成果によれば、狩猟採集社会における一般的な性分業は、男性が狩猟、女性が採集という二分法であり、狩猟への依存度が大きい集団ほど性分業は厳格になる傾向が強いとされる。また、同じ種類の食物を獲得する場合でも、男女で異なる道具を用いる場合がある。

一般的に、女性は男性より作りも扱いも単純な道具を用いることが多いという。

狩猟採集社会の一般的な性分業に照らし合わせれば、本来、根茎類の採集は女性の仕事であったであろう。石製土掘り具の利用が本格化する以前にも、掘り棒などを用いた作業が行われていたことは十分想定できる。

しかし、石製土掘り具の獲得には、男性の関与が必要である。クン族では、女性の採集活動範囲はキャンプから半径8km以内であるという。牧野小山遺跡から最も近い粘板岩質ホルンフェルス露頭あたりまで直線距離で12km以上、実際の移動距離はそれ以上になる。野篁遺跡からだともっと遠く、牧野小山遺跡から飛騨川を10kmほど遡った白川町内でも石製土掘り具には粘板岩質ホルンフェルスが主に用いられている。どこで石製土掘り具の素材が得られるかという情報は女性の領域外にあり、男性の有する情報なくして石製土掘り具の製作はかなわない。製作技術も、器形の厚さを念頭に置いた素材剥片の作出、石材の特質を良く理解した刃部と側縁の加工の区別など手慣れたものを感じさせる。少なくとも製作には、男性が深く関与したと考えて良からう。

では、何故男性が土掘り道具の製作に関与するようになったのであろうか。さまざまなモデルを想定することができようが、最も考えやすいのは男性の根茎類採集への参画であろう。

根茎類の採集が女性の仕事であった段階には土掘り具と石器製作は結びつかず、石製土掘り具は存在しなかった。ところが、男性が根茎類採集に参加するようになり土を掘る機能への要求と石器石材の知識が結びつき、新しい道具の製作が可能となったのではないだろうか。

では、再度の問いである。何故男性が根茎類の採集に参加するようになったのであろうか。その理由についてはまだ明らかにすることができない。根茎類採集の重要性増大なども想定されよう。ただし、この問いは食物獲得システム全体を視野に入れ、さまざまな側面から検討する必要がある。

石製土掘り具については、従来より使用の観点からの検討が盛んに行われてきた。今回は、製作について検討することにより、縄文社会の性分業について問題を提起することができた。性分業（食物獲得における）は、人類にとって最も基本的な役割分担のひとつである。今後、こうした視点は縄文社会を理解する上で欠かすことができないものになってくるであろう。その意味で、石製土掘り具はますます重要な研究素材となりうると私は考えている。

なお、本稿の執筆にあたり、石材について古田靖志氏

(岐阜県博物館学芸部)より、野笹遺跡の資料について千藤克彦氏(同上)より有益な助言をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

引用文献

アルレット・ルロワ＝ゲーラン、アンドレ・ルロワ＝ゲーラン著、
山中一郎訳 1992『アイヌへの旅－北海道 1938年－』
大阪文化研究会 pp.56

参考文献

- 馬場伸一郎 2002「野笹遺跡の剥片石器群について」『野笹遺跡Ⅲ』(財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第87集
- 川崎保 1997「東信地方の打製石斧石材について－縄文時代石器石材の一樣相－」『長野県埋蔵文化財センター紀要』6
- 近藤善教・坂巻幸雄・下坂康哉・黒田和男 1974「表層地質美濃加茂」『土地分類基本調査 美濃加茂』経済企画庁
- 紅村弘・増子康真・間宮瑞夫・伊藤克司 1973『牧野小山遺跡』岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会
- 麻柄一志 2003「打製石斧が使われた場所」『考古学に学ぶ(2)』同志社大学考古学シリーズ8
- 長屋幸二 1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター調査報告書第22集
- 長屋幸二 2003「東海・関西地域における打製石斧の選択」『縄文時代の石器Ⅱ－関西の縄文前期・中期－』関西縄文文化研究会
- 斎藤基生 1991「打製石斧の性格」『季刊考古学第35号 石器と人類の歴史』雄山閣出版
- 佐野康雄 1996『牧野小山遺跡発掘調査概報』岐阜県文化財保護センター調査報告書
- 佐野康雄 1998『牧野小山遺跡C地点』岐阜県文化財保護センター調査報告書第39集
- 千藤克彦 2000『野笹遺跡Ⅰ』(財)岐阜県文化財保護センター調査報告書第66集
- 鈴木次郎 1983「打製石斧」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 通商産業省地質調査所 1974「表層地質図 美濃加茂」経済企画庁
- 吉田英敏 1994『川合遺跡群』可児市教育委員会

註

*1 通常「打製石斧」と称される石器であるが、その主な用途は木材の伐採・加工ではなく土掘りである。研究者・埋蔵文化財担当者の中にも、そのことを承知しながら「斧」という名称に無意識下でとらわれている傾向があり、この石器の正しい評価を妨げている。例えば、遺跡評価のためには加工具と生産具の区別を明確にしなければならないのに、磨製石斧と当石器を併記する調査報

告がきわめて多い。また、当石器の系譜を単純に「礫斧」に求めることに対する問題も指摘されているが(2003長屋)、「打製石斧」という名称が礫斧系譜論の遠因の1つであるとも考えられる。用語が研究者の認知構造に多少なりとも影響を与えうることは想定されて良いであろう。研究者以外の人たちにとっても、誤解を招きやすい用語であることはいうまでもない。これらの点をふまえ、本論では「打製石斧」ではなく「石製土掘り具」と称することとする。

- *2 この期間中、継続的に地表面採集をしていたわけではないようである。記されている採集日を見ると、昭和18年1月が11点、昭和22年10月が6点、昭和23年5月が21点、昭和25年1月が13点、昭和26年5月が25点と、数回に分けて採集している様子がうかがわれる。
- *3 美濃加茂市が昭和29年に発足した時に、和知村の牧野地区も合併している。現在は美濃加茂市牧野となっている。
- *4 粗製の石材を用いた刃器。円礫面を背面に残した貝殻状の剥片を用い、縁辺をそのまま刃部として用いることが多い。石器の名称は報告書(千藤 2000)に依った。
- *5 報告書では泥岩とされているが、粘板岩質ホルンフェルスのようなものである。
- *6 「横長剥片を用いる」という記述が報告書に目立つが(馬場 2002 ほか)、本当に横に長い剥片を素材としているのであろうか。扁平な板材を分割したものを素材としている可能性も想定される。素材剥片からの製作工程が検討されないうちは「剥片を横位に用いる」という表現の方が適切であろう。
- *7 <実測図について> 剥片石器に準じて、切り合いをリングとフィッシャー、稜線で表現する松沢方式をとった。この方法はヒトの行為を読みとり、表現することに長じているが、当石材のように材質が人為を大きく規制している場合には、石材の情報が、より重要となる。今回は、リングを2本重ねたりフィッシャーを折り曲げることでステップを表現し、層理の発達を示そうとしたが、層理の状況などを細かく描写するにはスケッチ風の表現の方が適しているであろう。

しかし、報告書などにおいて石材毎に表現方法を変えることは、器種全体を議論する上で支障をきたすことにもなりうる。論文においても汎用性を持たせることができなくなるおそれがある。そこで、石材の情報は写真を添えて伝えることとした。

- *8 筆者は、かつて東海では中期後半までの石製土掘り具が搬入石材による例が見られることを指摘したが、美濃加茂市・可児市周辺の遺跡では手近な石材を用いていると例外的な扱いをした(長屋2003)。これは、報告書では推測的なニュアンスで記述されていた内容を、検証することなく受け入れてしまったことによる。しかし、今回の現地調査によって、当地域でも決して手近な石材を用いているわけではないことが確認できた。